とんがらしの誘惑

椎名誠

文藝春秋

とんがらしの誘惑

椎名 誠

文藝春秋

とんがらしの誘惑(ゆうわく)

1999年5月10日　第1刷

著　者　椎名(しいな)　誠(まこと)

発行者　藤沢隆志

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23（〒102-8008）

電話(03)3265-1211

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　加藤製本株式会社

＊定価はカバーに表示してあります

＊万一落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送り下さい

© Makoto Shiina 1999

Printed in Japan

ISBN4-16-355150-6

とんがらしの誘惑　目次

戦闘的文学賞作戦　9
まぶたがぴくぴく　15
堂々めぐり　21
ツミレのミンチ攻撃　27
線虫文字からの脱出　33
ボロボロゾウシとの再会　39
雪国東京　45
ミニパトとのタタカイ　51
我　ゲホゴホ怪獣となりて　57
うーむ式電脳小説　63

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

お怒りの海　69
そんなに叫ぶなあああああ！　75
音感後進国　81
マサコよ責任をとれ！　87
パンツのあるなし　94
家（か）のもんだい　100
銀座のお姐さんの研究　106
桜の下の墓参団　112
連想のバタバタ　118
状況判断　124

ダラダラ記念日　130
食前酒の陰謀　136
怪奇快感酵素風呂　142
灰とフラメンコ　148
カビの宿　154
またがり岩巷伝　160
オロロン島にて　166
疑問形会話の謎　172
リアス式海岸の夜　178
まぶしいサンタクルズ　184

ニューヨークのニワトリ人間　190
焼干し絶讃！　196
問題民宿　202
ラーメンの甲子園　208
キャタピラ虫が待っている　214
ばか夏の決算　219
キタクコンナンシャとは何か？　225
入り口のにおい　231
旅の夜空に　237
あとがき　243

装画・挿画　沢野ひとし
装幀　南　伸坊

とんがらしの誘惑

初出『週刊文春』一九九七年十二月十八日号～一九九八年十月一日号

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

戦闘的文学賞作戦

日本ＳＦ大賞の授賞記念パーティに行った。あまりパーティにはいかないのだけれど、たまにいくと華やかでいいものですね。受賞者は宮部みゆきさん。この賞は数年前にぼくも貰っているので「ぼくのほうが先輩だからね」と宮部さんに少しエバった。

ぼくがこの賞をもらう前年は夢枕獏さんで、この頃文学賞チャンピオンベルト論がプロレス好きのモノカキの間で言及されていた。

つまり文学賞は一度それを貰うと能力が落ちてもずっとその賞の威光がついてくる。しかしプロレスのチャンピオンは力が落ちてチャレンジャーに負けるとタイトルを返上する。横綱だって力の限界を感じました、などといって親方とか年寄になってきっぱり後継者に道をあける。ゆえにブンガク賞もベルト制にして、翌年の受賞者と対決し、負けたらいさぎよくそれを渡す

ようにしたらどうか、という考えである。
　獏さんはその年ＳＦ大賞と、もうひとつＳＦ界では読者大賞の位置づけにある星雲賞を同じ作品で受賞し、二大タイトルホルダーになったので、それをふたつかけるからチャンピオン統一戦をやろうじゃないかというのだ。
　プロレス界は一時チャンピオンタイトルを乱発し、あっちこっちにいろんなチャンピオンがいるのでどうもこれではタイトルの権威がない、ということになり、いくつかのベルトを統一した。新日本プロレスのＩＷＧＰとか全日本プロレスの三冠統一などがそれである。
　ぼくは獏さんのチャンピオン統一プランに「いいじゃないかやってやろうじゃないか」とすぐに応じたのだが問題は何をどうやってどう判定するか、で、そこのところが難しく、実現できなかった。もしあのときやってたら、ずっと続き、宮部さんは昨年のチャンピオンとタタカウことになるのだがよく考えたら昨年のＳＦ大賞はガメラだった。宮部さんとガメラのタタカイも面白いだろうなあ。
　さっきの判定の方法だけれどこれからそのあたりのところを誰か工夫して考えてくれないだろうか。まあ考えられるのは純粋に作品の力と力をオーソリティに判定してもらう、ということになるのだろうが、負けたら相手に賞のタイトルから賞金までとられちゃうのだから狩人的でスリリングでいいなあと思うのだ。直木賞にＳＦ大賞が挑戦するなんていうのも、プロレス

の異種格闘技戦みたいでわくわくするなあ。

ぼくは小説新人賞の選考委員をいくつか担当しているが、新人賞は沢山あって毎年沢山の新人賞作家が生まれてくるけれど、受賞者が沢山いすぎてよくわからなくなってしまう。

その年の各新人賞受賞作品を一堂に集めてその中から最高作品を一編選ぶという《統一新人賞》というのぐらいだったら、実現できるのではあるまいか。

その年間チャンピオンの新人賞とその年の直木賞がタタカウというのもいいのではないか。

文学新人賞があるのだから文学老人賞というのがあってもいい。もうリタイヤ同然で十年も書いていない老作家が競いあうというしくみである。しかしコレ選考委員には誰もなりたがらないだろうなあ。

専属作家制度というのはどうだろう。ひとむかし前の邦画各社との専属俳優契約みたいなもので、出版社と作家が専属契約してヨソの雑誌には書かない。原稿料は年俸制、しかし力が落ちるとトレードに出されてしまうのである。自分が一対三のトレードの三人のほうになったりしたらつらいだろうなあ。この話はやめ！

まあ久しぶりに作家の沢山集っているパーティに出たのでいろんなことを考えてしまった。

会場にいた銀座のきれいなお姐さんが「このあといらっしゃいませんかあ」といろっぽく言うのでたちまちくらくらして三人のおじさんと行ってしまった。銀座のクラブへ行くのもひさ

しぶりで、なにかいろんな話をしたように思うのだが全部忘れてしまった。
銀座のクラブというのはサラリーマンの頃のほうがむしろよく行った。作家になるとそういうところへよく行くのでしょう、などと言われるが全然逆で（行く人はよく行くのだろうが）、カラオケなんかもサラリーマンの頃はよくやったものだ。
今年ひょんなことで久しぶりにカラオケをうたったらけっこうなつかしくて、それから三回つづけて行ってしまった。ぼくがサラリーマンの時代の後期に、ちょうどカラオケが入ってきた。それまでは流しのギターにあわせて唄ったり手拍子の中でうたうということが多く、そういうやりかたで鍛えられたので、いっちゃあなんだがぼくはヤルとなったらけっこうヤレルのである。
映画の撮影で一カ月以上もどこかにこもっているとスタッフは連夜のカラオケになっていたが、その人々の前では絶対にやらなかった。
なんだかここで自分も一緒になって「ああアーすばるよオー」なんてうたってたら、おわりだ、というようなよくわからない危機意識があったのだ。
このあいだ木村晋介と目黒考二と久しぶりに「ひょっこりひょうたん島」をうたってたのしかった。カラオケで疲れるのは同じ人がたてつづけに何曲もうたうのと、英語やフランス語なんかで上手にうたう人々だ。あれはどっちにしてもたて続けではなくて、酒をのみ、いろんな

それが新宿
赤マント
オーレ
なによ
ベルトのおやじ
うルサイね
一人
三曲まで
ボチボチ
あの人まだ
うたっている
もうかんべん
してよ

話をし、じゃこのへんで誰か一曲、っていうのが一番いいと思うのだけどオレもワタシもとなってああいう阿鼻叫喚状態になってしまうのだろうなあ。それから思ったのだけれど、カラオケには三番目（三章目というのかな、要するに三パーツのうちの最後）はいらないのではないだろうか。うまくてもヘタでもシロウトの場合は三番あたりでたいていダレルものなあ。

話はどんどんとぶが、このあいだやっとヒクソン・グレイシーと高田の試合のビデオを見た。ヒクソンの鬼気迫るような構えに感動した。といってもこの業界のことを知らない人はなんだかさっぱりわからないですね。すいません。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo